

最新の研究によると、銀河系には少なくとも三十六の知的文明が存在する可能性があるという。

一九四七年六月二四日、アメリカ人のケネス・アーノルドはワシントン州のレーニア山付近上空を自家用機で飛行中、高速で編隊飛行を行う九つの三日月形の物体を目撃した。アーノルドは新聞記者の取材で「水面を皿が跳ねるような飛び方をしていた」と語ったことから「空飛ぶ円盤」という名称が生まれた。以降も同様の物体の目撃報告は相次ぎ、地球外生命体——いわゆる宇宙人としてSF小説や映画に盛んに取り上げられた。

日本にも古来より地球外文明の存在を示すものは残されている。縄文時代につくられた遮光器土偶は宇宙服を着た姿のようであり、法隆寺西院伽藍五重塔にある侍者塑像のなかには頭部が馬、鳥、鼠のかたちをした宇宙人らしきものもある。現存する日本最古の物語『竹取物語』には月からの使者が登場し、江戸時代に常陸国の原舎ヶ浜に流れ着いた「虚舟（うつろぶね）」は地球外文明のものではないかとする説もある。

荒唐無稽と笑うなかれ。広大な宇宙で地球だけに文明が生まれたと考える方が不自然だろう。むしろ我々は大海にぼつんと浮かぶ孤独な存在ではないことを喜ぶべきではないか。

一九七二年と一九七三年に打ち上げられた宇宙探査機パイオニア10号・11号には、人類からのメッセージとして人間の男女の姿と地球に関する情報を示す記号を記した金属板が取り付けられた。地球外知的生命体探査の最初のケースとして何らかの反応を待ちわびている人は今も多い。

ただし、最初に述べた研究チームの試算によると人類がはるか彼方の知的文明と「会話」を交わすには片道三〇六〇年、往復六一二〇年にわたって無線通信を維持しなければならぬため、現在の技術ではほぼ不可能とされている。

一方、別の研究チームの発表によると、人類が出した電波を受信可能な惑星は太陽系付近に二十九個あることがわかった。これは人工的な電波を受信できる一〇〇光年（一光年は光が一年間に進む距離）以内かつ生命の存在に不可欠な水がある惑星の数である。人類が電波を使用し始めたのは一八九五年から。光と電波の速度は同じため、既に一三〇年経過した今、同チームの報告は「既に相手には地球に生命が存在することが分かっているかもしれない」と結ばれている。

* * * * *

「ハ——ッ……」

夜明け前の空に向かって、陽ノ宮碧は白い息を吐いた。

山の稜線が薄明の空と溶け合うように色を変えていく。三月は冬が終わり、春の到来を待つ幕間のような時期だ。朝刊を運ぶバイクの音が聞こえる。

「この景色もしばらく見られなくなるのか」

冷え切ったベランダから室内に戻ると、ペットボトルに残っていた水を飲み干した。そして再びベッドに潜り込み、朝食の時間までしばし眠りについた。

碧という名は青空のように心の澄んだ人に育ってほしいという願いを込めて付けられた。

「井の中の蛙、大海を知らず」

碧の父の口癖だった。小さな井戸で過ごした蛙は外にある広い世界のことを知らない。若いうちはどんどん外へ出て広い世界を見てこいという父親の後押しで高校卒業後は東京の大学へ進学することになったが、初めての一人暮らしを前に碧の心はざわついていた。

長野県上田市は人口十五万人、県内では長野市、松本市に次いで三番目の都市である。

険しい山々に囲まれた盆地ゆえ本州では最も雨が少ない。ともに標高一二五〇メートルを超える独鈷山と夫神岳から扇状に広がる塩田平一帯は田園風景が広がる風光明媚な地として人々の心を動かしてきた。

信濃国分寺は奈良時代、聖武天皇が仏教による国家鎮護のため日本各地に国分寺建立を命じた際、この地に建立された。承平の乱で焼失したといわれているが、室町時代に現在の場所へ再建。境内には薬師如来を安置する本堂や、現存する国分寺の塔で最も古く国の重要文化財に指定されている三重塔などの堂塔伽藍がそろっている。

生島足島神社は生きとし生けるもの万物に生命力を与える「生島大神」と満足を与える「足島大神」の二神が祀られ、摂社（下社・下宮）には諏訪大神が祀られる信濃屈指の古社だ。生島大神と足島大神を祀る神社は全国的にも珍しく、近畿地方を中心に数社、東日本では皇居内宮中三殿とこのみである。

夫神岳のふもとには信州最古の温泉といわれる別所温泉がある。日本武尊（やまとたけら）が東征の際、峠で出会った老人の「この山中に七つの湯が湧き出て人々の七つの苦し

助ける」というお告げに従い探したところ七つの効能の異なる温泉が見つかり、兵たちの傷を癒したと伝えられている。温泉街に近接して安楽寺、常楽寺、北向観音といった塩田北条氏ゆかりの古刹があることから「信州の鎌倉」とも呼ばれている。

信濃国分寺と生島足島神社、そしてこの別所温泉を結ぶ直線はレイライン（光の道）と呼ばれ、太陽の光の加護を受けている。上田に住む人は皆、この陽を浴びて心穏やかに育った。

碧は一年の中でも太陽の暖かさを強く感じる冬から春への変わり目が大好きだった。肌寒くとも視界いっぱい広がる青い空のもと陽の光を浴びれば心の中まで暖かくなる。できることなら、このまま上田の地を離れたくない。

四月になった。

引越しはあつという間に済み、慣れないスーツを着て入学式に出席した。式典の模様はインターネットでライブ配信されたため、両親は上田にいながら息子の門出を見守った。前期の授業が始まるまでオリエンテーションと称して新入生は広いホールに集められ、大学生活を送るうえで必要な説明を受ける。そして学部、クラスごとのガイダンスが開かれ、必要書類の提出や履修登録などが行われる。知り合いがいない心細さもあったが、碧は勇気を出して隣の人に話しかけてみた。会話はぎこちないまま終わったが、この感じも悪くない。

新歓シーズンは部活やサークル勧誘の声かけでキャンパスが一年で最も賑わう時期だ。桜の花びらが舞い散るなか、アメリカンフットボールやチャアリーディングのユニフォーム姿で新入生に声をかける人がいれば、SNSのアカウントが記されたチラシやカードを配る人もいる。みんな活気があって楽しそうだ。

「アルバイトもいいが、サークルには必ず入っとけよ」という父の言葉が反芻された。「きつと一生の付き合いになる友達が見つかるからな」

親友なら既にいる。幼稚園から一緒の鈴木、サッカー部の佐藤、ゲーム仲間の高橋。だが、彼らはみんな上田に残った。

サークルのなかには名前だけで活動実績がほぼないものもあるという。遊ぶだけの集まりに貴重な四年間を費やすつもりはない。碧は喧騒のなか映画研究会を探していた。

上田は大正時代から映画のロケーション撮影が行われ、日本映画界を代表する監督たちが作品を作ってきた『映画のまち』の顔も持つ。碧が小学生のときに観た『サマーウォー』

ズ』というアニメ映画は上田が舞台だった。人々が生活の大部分をインターネット上の仮想世界で行う近未来、天才的な数学の才能を持つ高校生が世界破滅の危機に挑む物語だ。

劇中には見覚えのある風景がたくさん登場し、ストーリーのおもしろさと相まって夢中にさせてくれた。聖地巡礼と称し、全国から本作のファンがやってくる光景もたくさん見えてきた。公開から十年以上経った今も人の流れは絶えず、根強い人気を誇っている。

「映画って、すごいんだな」

碧は上田を舞台にした物語の脚本を書きたいと思っていた。映画にすれば、上田の風景は永遠に残り、後世の人々に伝えられる。そんなことを思いながらサークル棟の廊下を歩いていると、掲示板に貼られた一枚のチラシに目が止まった。

記号のようなものが描かれている。なんだろう？ どこかで見たことがあるが思い出せない。

突然「はい、君、合格」と背後から声をかけられた。振り向くと長い髪の女性が立っている。

「えっ？ 合格って？」

「ようこそ、新入生。歓迎するよ」

歓迎は嬉しいけど、いきなり腕を掴まれているこの状況はどう考えてもおかしい。

「ちよっと待ってください！ たしかに僕は新入生ですけど、張り紙を見ていただけですから」

「『見えた』から立ち止まったんだろう？」

「ええ、なんの記号だろうなと思って」

「『見えた』なら合格だよ」

「どういうことですか!?!...うわわっ！」

そのまま目の前の部屋に押し込まれた。

壁に古い映画のポスターが何枚も貼られ、奥のソファに二人の男女が座っていた。

軽薄そうな見た目の男性が「えっ、部長。もしかして新メンバーっすか？」と驚いたように言った。

毛先を青く染めた全身黒づくめの服装の女性は、顔を上げることなく分厚い本を読んでいる。

「私は部長の月霞だ。新入生の君、名前は？」

「い、一年の陽ノ宮といいます。あの……ここつてもしかして映画関連のサークルですか？」

この大学には映画サークルが複数存在する。碧が入会を検討していた映画研究会は他大生を含め部員が一〇〇人以上在籍し、これまで業界の第一線で活躍するOBやOGを多数輩出している。部屋を見渡す限り、どうやらここではないようだ。

「うちは少数精鋭の映画サークルだね。誰でも入れるわけじゃない。君が快く入ってくれと我々としてもありがたいんだが」

さっきの男性が鼻歌交じりで会話に割って入ってきた。

「うんうん、メンバーになったら毎日退屈しないと思うよ。なにしろ部長は『呼ぶ』人だから」

「呼ぶ？ 呼ぶって何だ？」

怪訝そうな碧の態度を見かねた男性が「部長、いいつすよね？」と確認をとると、おどけた調子で大きな声をあげた。

「ぼんばかぱーん♪ ここに御座せられる部長は、地球調査という大きな任務を負った宇宙人なのでーす！」

何を言ってるんだ？ この男の人は。第一、宇宙人ともあろう者がこんなにも簡単に正体をばらされてもいいのか？ ……えっ、部長、ちよつと誇らしそうだぞ？

「本物の宇宙人なら証拠を見せろと言いたそうな顔だな」

「……まあ、はい。そうですね。超能力とか」

待ってましたと言わんばかりに部長は「やれやれ」と、ため息をついた。

「君は今、何か飲み物を持っているかい？」

碧はバッグの中からペットボトルの水を取り出した。

「それを一口飲んでみてくれないか？」

言われるままにした。すると部長は細い指先をつつとペットボトルのふちをなぞり、もう一度飲むようにうながした。

「うわっ、しょっぱい！」

「私はね、この手で触れた空間内で自在にナトリウムを生成することができるんだよ」
驚いた。もう一口飲んでみた。たしかに塩の味がする。

「元に戻すこともできるんですか？」

「それはできない」。即答だった。

続いて五〇〇円玉をガラスカップに通過させたり、ナイフで切ったレモンの中から丸めたトランプを出現させたり、超能力をいくつか見せてくれたが、徐々にスケールダウンしていく内容に碧は思わず「手品か！」と心の中で激しくツッコんだ。

「他にないんですか？ 例えば、僕の考えていることがわかるとか」

「他の個体の思考を許可なく勝手に覗くなんてプライバシーの侵害も甚だしいだろう」

ええーっ！ なんてジェントルな宇宙人なんだ。

「でことで、よろしくね、ヒノミヤちゃん♪ あ、俺は政治経済学部二年の小縄。でもってこっちは法学部二年の星羅ちゃんです」

星羅は読んでいる本から目を逸らさないまま小さくうなずいた。寡黙そうだが不思議と嫌がられている感じはしない。

「陽ノ宮、君がさつき見ていた部員募集のチラシには、澄んだ心の持ち主にしか見えない記号を施しておいたんだ。あの記号には地球元始からのすべての事象、想念、感情が記録されているから「見えた」人はきつと懐かしさを感じただろうね。私は、私が宇宙人であることを知られても構わない人物と地球調査活動をしたかったんだ」

なるほど、部長の正体を口外しない人物として選ばれたわけか

「もちろん映画という地球人の記録媒体にも大いに興味がある。私はこの星に来てまだ日が浅いから、いろんなことを知りたいんだよ。君たちと一緒に」

にわかには信じられない話だが、碧は部長が嘘を言っているように思えなかった。

「では早速、君の歓迎会を開こうと思うんだが、出身はどこだい？」

「待ってください！ 歓迎会って、話が早すぎます！ そもそも僕はこのサークルに入るなんて、ひとことも言っていないんですけど」

「それでも君は心の中で思っているはずだ。なんだか面白そうだなと。この歓迎ムードも案外心地いいものだろう？」

うう、それは否定できない。

「もし……もしここで入会を断った場合、僕は記憶を消されるんですか？」

「まさか。なぜそんな無意味なことをすると思うのかい？ 記憶ほど美しいものはないだろう」

まっすぐこちらに向けられた視線は嘘をついているように思えない。どうやら悪い宇宙人ではなさそうだ。

「長野県の上田市です」

「ほう！」と部長は声をあげた。

「なるほど。君はレイラインの加護を得た者なんだな」

「レイラインの加護？ レイラインを知ってるんですか!？」

「ふふふ。太陽の光が生み出す驚くべきパワーは宇宙人である私からしても興味深いからな」

小縄先輩も興奮気味に「上田って『サマーウォーズ』の舞台？ 俺、あの映画大好きなんだ！」と激しく反応した。

「ひよっとしてヒノミヤちゃんも数学の天才だったりするわけ？」

「まさか！ だったら受験勉強であんなに苦労してませんよ」

二人の会話の間隙を突くように「昔の……」と小さな声で星羅先輩が手を挙げた。

「古い日本映画は好き？」

意外な質問に碧の心は踊った。

「はい。好きです。うちの地元、映画のロケで結構使われてるんです。黒澤明とか、溝口健二とか、成瀬巳喜男とか」

星羅は碧の手を取り、目をキラキラさせた。

「決まりだな。歓迎会は今週の土日、上田市に一泊二日の視察旅行と行こう」

部長の提案に「イエーイ！」と声が上がった。

「えっ？ えっ？ 歓迎会って普通はお店とかでやるものじゃないんですか？」

「それじゃつまらないだろう。君の歓迎会なんだから君が一番喜ぶことをしてあげるのが最適解じゃないか？」

一瞬、心のなかを見透かされた気がした。

「もちろん我々も楽しませてもらおうよ」

「待ってください！ 交通費はどうするんですか？ 泊まる場所は？ うちをアテにしてるんだったら無理です。親もいますし、いきなり皆さんを連れてきたらびつくりすると思います！」

「そんなことは心配しなくていい。もう旅館は予約したから……」

さつきからスマホをポチポチしていた星羅先輩が笑顔をみせた。

「見晴らし抜群の展望風呂と露天風呂。源泉掛け流し温泉を二十四時間堪能できます」

だって。楽しみ……」

慌ててスマホを覗き込むと、江戸時代に創業した老舗旅館の名前があった。

「ええっ、ここ学生が泊まるには高くないですか？」

「お金ならある……」

「星羅はプログラムを組むのが趣味だね。複数の企業とパテント契約をしていて毎月結構な額のライセンス料が入ってくるそうだ。そこにある備品も星羅が買ってくれたものだよ」

棚を見るとビデオカメラやプロジェクターが並んでいる。

「移動はレンタカーで行こう。小縄、運転を頼むぞ」

「おまかせください」

次から次へ起こる怒涛の展開に碧の頭のなかはパンク寸前だった。このまま流されて大丈夫なのか？ 断るなら今しかない。

「迷ってる暇なんかないって。人生は短いんだから、まず行動！ あつ、そうそう。土曜の朝、車で迎えに行くから住所教えて♪」

キラキラした笑顔の小縄に根負けして、自分でもまだ覚えきれていない住所をしつぷり教えた。

まさか上京からたった二週間で帰郷することになるとは夢にも思ってもいなかった。だけど、ワクワクする。上田に帰れるんだ！

* * * * *

朝六時。集合場所に指定された交差点。車は小縄先輩が用意してくれた大型のミニバンだった。

「すごいですね。こんな高級なクルマ、乗ったことないです。これで行くんですか？」

「あはは♪ 車内が狭いと、この人が文句言うからね」と部長を指差す。差された部長は後部座席で満足そうだ。隣の星羅先輩はぐっすり眠っている。碧は助手席に座り、シートベルトを締めた。

「それじゃ、出発しますか。これから約三時間の旅、お付き合ってください♪」

車窓からの景色は新鮮だった。朝日が差し込む道路はこの早い時間でも少し混んでいる。高層ビル群、テレビで見たことがあるチェーン店。練馬インターチェンジから関越自動車道に入ると、車は一気に加速していく。さつきから遠慮がちに小さく流れているaikoの歌は小縄先輩の趣味だろうか。後部座席からはスーツ、スーツという寝息が聞こえてくる。

「ヒノミヤちゃんも眠かったら寝ちゃっていいからね♪」

その言葉に甘えるように碧の意識は遠のいていった。これもすべて小縄先輩の運転が上

手なおかげです……。

ハッと目を覚ますと車は上信越自動車道を経由し、まもなく上田市に入ろうとしている。

「〃ひと笑顔あふれ 輝く未来につながる健幸都市〃」

スマホで「上田市」を検索したらしい星羅先輩が、市のキャッチフレーズを読み上げた。

「〃住んでよし訪れてよし子どもすくすく幸せ実感うえだ〃。いいところ……」

「なんか照れくさいです」

碧は背中を丸めた。

「軽井沢も近い……」

「雨、降らなくてよかったつすねー」

運転しながら小縄先輩は言った。上田市は晴天率が高く、年間平均降水量約九百ミリメートルと全国有数の少雨乾燥地帯。

「やっぱ冬は寒いのか？」

「はい、盆地なので。だけど山間部以外、雪が積もることは少ないんです」

「今日はヒノミヤちゃんの歓迎会なのに、いっぱい案内させちゃうけどゴメンネ〜♪」

「いえ！ 小縄先輩こそ運転おつかれさまです。僕も早く免許とりますので！」

「うんうん、なるべく一年のうちに取つといたほうがいいよ〜♪」

上田は戦国時代、真田家が徳川の大軍を二度にわたって退けたことで知られる城下町である。時は流れ、この地は大正から昭和にかけて日本の蚕糸業の中心地となる。富裕な養蚕家は当時最先端の娯楽だった映画に心酔し、東京の撮影所に遊びに行つては映画関係者と親しくなり、そこから上田でのロケが行われるようになったと言われている。

降水量が少なく、東京からほどほど近く、古くから残る建物や自然が数多く残っていることは製作陣にとって大きな魅力である。一九九七年からは上田ロケ作品をはじめとする日本映画の上映、新たな人材発掘を目的とした自主制作映画コンテストを行う「うえだ城下町映画祭」がスタート。二〇〇一年には映画・映像作品の製作支援を行う信州上田フィルムコミッションが誕生し、数々の映画やドラマが撮影されている。

「小津安二郎監督の『一人息子』、成瀬巳喜男監督の『鶴八鶴次郎』、黒澤明監督の『姿三四郎』、鈴木清順監督の『けんかえれじい』、市川崑監督の『犬神家の一族』、山田洋次監督の『男はつらいよ 寅次郎純情詩集』……」

上田で撮影された作品名を碧が挙げていくたび、星羅先輩は目を輝かせた。

「全部好きな作品……。早く見たい……」

その手にはサークルの備品のビデオカメラが握られていた。

「ただし街中でやたらとカメラを回すのは控えるように。肖像権やプライバシーの問題があるからな」

部長、あなたって人はどこまでマナーを守れる宇宙人なんだ。

「日本映画もいいけど、『サマーウォーズ』の案内もよろしくね、ヒノミヤちゃん♪
俺、この日のためにDVDを観直してきたばっかだからさ」

上田駅に着いた時点で小縄先輩は猛烈に感動していた。車を駐車場に停め、しばらく駅周辺を散策することにした。

「うひゃあ、『サマーウォーズ』で甲子園に出場した上田高校！」

「……僕の母校です」

「なあなあ、これって、ひよつとして陣内家の門じゃねーの？」

「はい。上田城跡公園がモデルです」

各所に設置された『サマーウォーズ』の登場人物やアバターの看板を見つけるたび、小縄先輩は大きな声をあげた。

「こ、この商店街はもしかして……」

「上田わっしょいのシーンに出て来た海野町（うんのまち）商店街です」

「やっぱりそうか。上田わっしょいって夏祭りだよな？ いつやんの？」

「七月最終土曜日です。ちなみにこの先にある上田映劇って映画館は、先輩の好きなaikoさんの『果てしない二人』という曲のミュージックビデオのロケ地です」

「ええーっ、あの映画館もあんの!? 上田ってすげーなあ！ 部長！ ちょっと中、のぞいてもいいっすか？」

部長と星羅先輩は静かに首を振った。

「だよね。……ん？ てか、なんでヒノミヤちゃん、俺がaikoファンだって知ってるの!？」

退屈していないか少し心配だったが、星羅先輩は人が変わったようにスマホで一心不乱に写真を撮り、部長も興味深そうに上田の街を歩いていた。白い帽子とワンピース姿でたずむ部長は、まるで古い日本映画のヒロインのようだった。

予定時間を少し過ぎたところで、旅館のある別所温泉へ車で向かうことにした。大正十年に開通した風情漂う別所線にも乗ってもらいたかったが、限られた滞在時間を考慮した結果だ。

別所温泉は今から約一五〇〇年前、日本武尊（やまとたけるのみこと）が東征の折に発見されたといわれている。また「別所」という名前は平安時代中期、平維茂（たいらのこれもち）が活鬼紅葉（かつきもみじ）という鬼女の退治を北向観音に祈願し、成功したことから別荘を建て、別所と呼んだことが由来とされている。

平安時代初期に開創された北向観音には縁結びや家庭円満をつかさどる愛染明王（あいぜんみょうおう）を祀った愛染堂、縁結びの巨木「愛染カツラ」があり、恋愛成就のパワースポットとして女性に人気が高い。映画やドラマにもなった川口松太郎の小説『愛染かつら』のモデルでもある。

「それで陽ノ宮、ご利益はあったのか？」

「……残念ながら、まだです」

部長に顔を覗き込まれて、碧は顔を赤くした。

「成就までに個人差があるようでして」

信州最古の禅寺、安楽寺。この境内の奥には日本で唯一の木造八角塔で、長野県の国宝第一号に指定された八角三重塔がある。その不思議な形状に一行はしばし見入った。

別所神社の入り口は、常楽寺の坂道を下った左手にある鳥居だ。石段を登ると正面に拝殿。右側にある神楽殿の見晴台に立つと、塩田平から市街地まで見渡すことができる。

常楽寺本堂は当時そのままの色彩を残す格天井が美しい。ご本尊の「妙觀察智弥陀如来（みょうがくさんぢみだにょらい）」は全国的にも珍しい宝冠を頂く阿弥陀様である。

「神社仏閣巡りって楽しいな！ ヒノミヤちゃん」

「神秘的だった……」

「実に興味深かったぞ、陽ノ宮」

みんなの感想を聞きながら碧は誇らしかった。そして、改めてこの地に神社仏閣がこれ

だけ数多く建てられた意味を考えていた。

旅館に到着して男性、女性二名ずつそれぞれの部屋に案内されると、夕食まで休憩をとることにした。

夜六時。男性陣の部屋に四人分の食事が運ばれてきた。

「うわっ、美味そう！」

黒毛和牛のステーキをメインディッシュに加えたコース料理は絶品だった。星羅先輩、ありがとうございます。僕は地元なのにこんな豪華な食事はしたことありません。華奢な見た目とうらはらによく食べる星羅先輩は、おひつのおかわりを二度もお願いしていた。

賑やかな食事が終わると、テンションの上がった小縄先輩が切り出した。

「さてと、まだ時間も早いし、腹ごなしがてら夜のドライブでもしますか」

四人は再び車に乗り込み、ぐるりと上田市を一周することにした。小縄先輩は a i k o の「果てしない二人」が収録されたアルバムを流し始めた。楽しい。すごく楽しい。大学生になると、こんな土曜日の過ごし方もあるんだ。碧はこの瞬間が永遠に続いてほしいとさえ思った。

空飛ぶ円盤が現れるまでは。

* * * * *

「えっ！ あれ、円盤じゃないですか!？」

碧は窓の外に巨大な飛行物体を発見した。夜空にかなり巨大だ。まるで呼吸をするように光を点滅させている。

「なになに!? 『未知との遭遇』!?」

『『アステロイド・シテイ』……』

『『インディペンデンス・デイ』!?』

『『マーズ・アタック』……』

「ひゃー、てことは侵略されちゃうワケ、俺たち!？」

どうやら小縄先輩と星羅先輩は過去にも円盤と遭遇したことがあるようだ。なるほど、これが前に言っていた“呼ぶ”の正体か。

はしゃぐ二人をよそに部長は黙ったまま円盤を見つめている。考えごとでもしているのだろうか。ほどなくして正体不明の円盤は碧たちの車に少しずつ接近してきた。

「なんか追いかけてきてるみたいですけど」

円盤は不規則に光の点滅を繰り返している。まるでモールス信号のように。

部長が「……水が……飲みたい」と小さな声で言った。

すかさず星羅先輩が「お水……」と新品のペットボトルを差し出した。

「ふふふ。ありがとう。でも必要なのは私じゃない。あの円盤だ」

珍しく真剣な表情の部長に、碧は「いったい何が起きているんですか？」と訊ねた。

「緊急事態だ。陽ノ宮、この近くに大きな湖はないか？」

「どういうことですか？」

「湖？ あの円盤は地球外から飛来した生命体だ」

「つまり生きてるってことですか？　なんか光ってますけど」

「光。どうやら群れからはぐれた赤ちゃん円盤が水を求めて我々に助けを求めている」

碧は再び窓の外を見上げた。赤ちゃん？　にしては巨大すぎるだろ。

「あの大きさがまるまるつかる水場が必要だ。このままでは死んでしまう。一刻を争う状態だ」

声の調子から部長の焦りが伝わってくる。

「さっき通った千曲川まで戻りますか」と小縄先輩が言った。

「市街地か。人目につくが仕方ない。そうしよう」

「だったら！」と碧は叫んだ。

「この近くに“ため池”があります！ 『舌喰池（したくいけ）』といっています」

「ため池か。大きさはどれくらいある？」

「東京ドームくらいあります。今の時期なら満水なので水の量も十分です」

舌喰池の満水時の貯水量は十三万七九〇〇トン。小学校の遠足でそう学んだことを思い出した。

「よし、そこへ案内してくれ」と部長が言った。

すかさず碧は「次の信号を右に」と小縄先輩に指示を出した。

五分もしないうちに舌喰池へ到着すると、円盤は水辺の上空に数十秒間静止し、そのままゆっくりと着水した。一瞬、底面がアサガオの花を逆さまにしたような形状に変化したように見えた。

弱々しい光を反射した水面に大きな輪が広がっていく。羽を休めていた鳥が飛び立つ音がした。碧たちもすぐさま車を降りてその光景を静かに見守った。円盤の光が少しずつ活力を取り戻していく。

「なんとか間に合ったようですね」

「ああ、私もこのタイプは初めて遭遇したよ」と部長も安堵の顔を見せた。

この円盤の赤ん坊は、なぜこの上田の地に来たんだろう？ 部長は「群れからはぐれた」と言っていたが、何の目的で？

「レイラインだよ」と部長は言った。

レイラインは一九二〇年代、イギリス中部のヘレフォードシャー州ブレッドウオーディンで複数の古い遺跡が直線に並ぶよう建てられていることを発見したアルフレッド・ワトキンスによって名付けられた言葉である。イギリス南西部を長大に貫く「セント・マイケルズ・レイライン」はパワースポットの宝庫として世界的に有名だ。日本でも茨城県・鹿島神宮と宮崎県・高千穂神社を結ぶ直線上には伊勢神宮、富士山、明治神宮、皇居が並ぶ。長年の研究の結果、レイラインは太陽と深い関係があると言われている。

「この地域には夏至の日の出の方角から差し込む光の線が聖なる直線を作って太陽の強大なエネルギーを蓄積されている」

「その聖なる直線って、信濃国分寺、生島足島神社、別所温泉をつなぐレイラインのことですか？」

「そうだ。おそらく円盤からすれば、この辺りがエネルギースポットであることは一目瞭然だ。もともと地球人には君のように特別な能力の持ち主以外、何も見えないがな」

「能力？ それがレイラインの加護ってやつですか？」

「上田の人々はみんな多かれ少なかれレイラインの加護を授かっている。だが陽ノ宮、君の加護は特別だよ。なにしろ私がサークル勧誘の張り紙に施した暗号が見えたんだから」

あの張り紙にはそんな仕掛けがしてあったのか。碧は“見えた”という言葉の意味がようやくわかった。

「おそらく円盤は定期的にこの地へ飛来してはエネルギーをチャージしていたんだろう。ところが何かの拍子にあの赤ちゃん円盤だけ取り残されてしまった。かわいそうに。ひとりじゃ水の摂取方法もわからなかったんだらう。かなり脱水症状が進んでいたよ」

「仲間の円盤は今どこにいるんですか？」

「心配ない。ついさっきコンタクトがとれた。もうすぐ迎えに来る」

碧はホッと胸をなでおろした。

「これって誰かに見られたらマズいっすよねえ？」と小縄先輩が口を開いた。ハツとして周囲を見渡すが、運良く周りには誰もいなかった。

「しかし、でつかいたため池だなあ」

「このあたりは年間降水量が上田の中でも特に少ない地域なんです。ただ、水田農業に最適な肥沃な土地だったので、農業用水を確保する目的で人工のため池をつくったんです」池のほとりに看板らしきものを見つけた星羅先輩がスマホのライトで照らした。

「築造は一六四一年って書いてある……。江戸時代……」

「はい。おかげでこのあたりは塩田三万石と呼ばれる穀倉地帯になりました。この先にも山田池という大きなため池があります。塩田平だけで大小合わせて約一〇〇カ所あって、二〇一〇年には農林水産省の『ため池百選』に選定されました」

「舌喰池……」

「文字で見ると、おっかない名前だな」

「実はこの池には悲しい伝説があるんです」

碧は池の名前の由来を語り始めた。かつて「大池」と呼ばれていたこの池は、土手からの水漏れが止まらなくなった際、生きた人間を土に埋めて改修工事がうまくいくように祈る「人柱」を立てることになった。くじ引きの結果、村はずれに住む若い娘が選ばれたが、彼女は悲しみのあまり舌を喰いちぎり池に身を投げてしまった。村人たちは娘に深く詫び、以来この池は「舌喰池」と呼ばれるようになった。

四人は池に向かって静かに手を合わせた。時刻は夜九時をまわろうとしていた。

ほどなくして円盤の仲間が飛来し、赤ちゃん円盤はあとを追うように空高く飛び立っていった。あつという間の出来事だった。去り際にパッパッと二回眩しい光を放ったのは感謝の意味だろうか。碧たちも大きく手を振って見送った。

「ところでさ」

小縄先輩が再び口を開いた。

「この池の水、農業用なんだろ？ あんまり減っちゃつてると農家の皆さんが困るんじゃないの？」

確かに水位がかなり下がっているように見える。

「その心配はない。宇宙人の協定により、異星探訪中に器物損壊などのアクシデントが起きた場合は必ず原状回復する義務が課せられている。遅くとも地球時間で二十四時間以内

には円盤が飲んだ水と同じ質量・成分のものがこの池に転移されるはずだ」
なら、よかった。部長が言うなら間違いない。

旅館に戻って露天風呂を満喫すると、一気に疲れが襲って来た。同室の小縄先輩もさすがに朝早くから運転してきただけあって、布団に入るや寝息を立て始めた。碧も体を横たえたが、しばらく目が冴えて寝付けず、この夜の出来事をいつか映画にできないものか考えを巡らせた。

翌朝、珍しく上田に雨が降った。

* * * * *

雨音で目が覚めた碧はしばらく窓の外を眺め、部屋の外に出てみた。四月とはいえ浴衣ではまだ少し肌寒い。少し歩いたところに緑の生い茂る庭を一望できる廊下があった。

部長がいた。

「おはようございます」

「おはよう。ちゃんと眠れたか」

「はい。おかげさまで」

サーツという雨の音と肌寒さが心地いい。

「ここはいい場所だな」

「はい。大好きな場所です」

朝食を食べ終えても雨は止みそうになかった。二日目は日本映画のロケ地を回る予定だったが、誰よりも楽しみにしていた星羅先輩の体調がすぐれないという。

「昨日、食べ過ぎた……」

「それじゃ今日のところは早めに切り上げて帰るとしますか」

「みんな……ごめん……」

申し訳なさそうにしている星羅を見て、「あのー！」と碧が切り出した。

「ここ別所温泉には五〇〇年以上続く『岳の幟（たけののぼり）』という雨乞いのまつりがあるんです。毎年七月に開催されていて、龍をかたどった色鮮やかな幟の行列がすごくきれいで、ささら踊りや三頭獅子舞の奉納もあるんですけど……よかったら、また来ませ

んか？ この四人で」

「いいねえ！」

満場一致で夏の予定が決まった。

帰路、高速に乗って軽井沢の手前でラジオをつけると、今朝早く長野県上田市で一時間に二〇〇ミリという観測史上初の記録的な雨量が局地的に観測されたことが報じられていた。数値的には大災害級にも関わらず、被害がなかったことをパーソナリティーが不思議がっていた。

「これってもしかして……」

「円盤の野郎、やりやがったな！ 宇宙人のよくわかんない技術で大量の水をテレポートするのかと思ったら！」

「地球の天気、利用した……」

「まあ、舌喰池だけを狙って雨を降らせる技術も大したものだがな」

東京へ向かう車内は四人の割れるような笑い声に包まれた。